

■ 編集だより

編集後記

2020 年度第 1 四半期の診療と教育の現場は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う対応に明け暮れた。診療面の対応については、一旦述べ始めると誤解のないように複雑な要因を詳述する必要が生じるので、ここでは記述を控える。一言で言えば、感染拡大防止のために種々の診療上の制約を患者さんにご家族にお願いせざるを得ない苦渋の日々であった。また、医療者自身のメンタルヘルスにも配慮が必要であった。教育面では、臨床実習は延期され、対面の講義はオンライン授業に置き換えられた。全国的にみると影響がより小さく済んだ地域もあると思うが、編集子の所属する東京都内の教育機関ではようやく 6 月末から臨床実習が再開され、8 月末までの補実習が計画されているところである。今回、全国の多くの教育スタッフが経験されたことと思うが、講義用 PowerPoint ファイルを用いて存外簡単に音声つき講義ビデオを作成できることを知り、実践した。その気になれば、YouTube 上に自分の講義をアップすることも造作ないことのようなのである。ともあれ、PowerPoint ファイルの最後に学生に課題を提示するページを追加し、すべてのスライドに解説の音声をつけることで急場のオンライン講義ビデオを作成することができた。学内の教務責任者からは、今後生じかねない感染再拡大に備えて、実習クルズスなどの教育資料を今のうちにできるだけ多数ビデオ化することが求められている。学内や学会関連の会議も Web 会議に移行したが、これまた至極便利に、思いのほか行き届いた Web 会議システムが手持ちのパソコンで（あるいはスマートフォンでも）手軽に利用可能であることに驚いた。従来からこうしたシステムに慣れ親しんでいる方々は何をいまさらと思われるだろうが、少なくとも編集子には新鮮な体験の連続であった。本誌の編集委員会も 3 月から Web 会議で行われ、従来の対面での委員会と同様の合議が問題なく遂行されている。

さて、実はコロナ禍以前から、本誌は重要な変革期にある。その事情はすでに本学会副理事長・本誌副編集委員長の細田眞司先生が「精神神経学雑誌の刷新・発展に向けて」として本誌 122 巻 3 号 (2020 年 3 月号) の巻頭言において述べておられる。繰り返しになるが、かいつまんで述べると、PubMed (アメリカ国立衛生研究所の一部門である National Library of Medicine による検索データベース) への本誌の掲載が 2017 年以降停止されており、再掲載の要件として以下が挙げられた。すなわち、①編集基本方針 (スコープ) を明確に記載すること、②英文抄録の付帯を必須とすること、③査読者は編集委員会委員に限定されないこと、④国際的な編集委員や査読者を置くこと、⑤図表を大きくわかりやすくすること、⑥投稿資格は会員に限定されないこと、⑦原著論文の比率を高めること、などである。「2020 年 5 月 25 日より実施」の投稿規定がこれらに対応した最新版である。編集基本方針はもちろんのこと、「日本精神神経学会の会員に限らず投稿できる」「投稿は和文または英文とする」「投稿論文の採否は、外部査読者を含む 2 名以上の査読意見をもとに編集委員会で決定する」「抄録: 和文および英文で作成する。英文抄録 (600 words 以内) はネイティブ・チェックを必ず済ませる」などと明記された。また、2020 年 4 月からドイツ、イタリア、オーストリア、オーストラリア (2 名)、インド、パキスタン、韓国、香港の 8 つの国と地域から招いた 9 名の研究者が本誌編集委員会の国際アドバイザーに名を連ねている。近いうちに冊子体が一新される予定であり、本誌がますます活気に満ちた雑誌に発展していくことを期待している。

布村明彦